

ちんすこうりな—「女の子のためのセックス」について

小川三郎

自己と他者を介在する手段のひとつにセックスがある。しかしその手段とは何よりも深いものであると同時に、何よりも浅いものである。また人間の狂的な欲望そのものでありながら、種の存続に欠かせない行為として万人に承知されている。その大きな振れ幅の理解をされる行為が、私たちの基本にある。

勃起した男性器を
穴に入れて
こすると気持ちがいい
ただそれだけのことだ
人間は
ばかみたいだ
そんな簡単なことは
誰とでもできるよ
そんなことをセックスと名づけて
愛し合っていると喜んでさ

(女の穴 部分)

直接的な言葉を使い、実生活をそのまま詩にするような手法は、大抵じめじめとした閉塞感とやりきれなさを覚えさせるものだが、ちんすこうりなの詩は、むしろ解放感を覚えさせる。セクシャルについての豊富な経験と哲学をアイデンティティとするちんすこうりなが、それを持って表現するものは人間というものの悲喜劇である。実直な顔をして日々を過ごしながら、一皮むけば欲望に振り回されてブレまくりながら生きる普通の人間たちである。

名駅前で偶然見かけたあの人はパパで
車椅子を押してた
あの人によく似た女の子が乗ってた

ますます好きだと思った
ますます

傷つけられたい

苦しくなりたい
涙を流したい
壊されたい
壊されたい
壊されたい

(いずみさん 部分)

普通は言うてはいけないことを、ちんすこうりなは平然と言う。言うてはいけないこととは、誰もが思っ
ていながら、言うてしまえば自分の立場を危うくしたり、まわりを気まずくさせたりすることであるが、そのよ
うなことをちんすこうりなは、行のなかに平然と入れ込みながら詩をかたどり、それよりもっと深い、生きる
ことのむなしさややりきれなさを描くことに使っている。普通は言うてはいけないこととは、本当のことだか
ら言うてはいけないのである。ちんすこうりなは、本当のことを言うために詩を書いている。だからちんすこ
うりなの詩表現に、それは必要不可欠な要素である。時には理解しがたい心理を描きはするけれども、それは
それとして受け入れられるのは、それだけ言葉や文体に説得力があり、不要な言葉を使っていないからだろう。

さみしさにつけ込まれて
池袋西口を出る

(そこにはなにもない 部分)

自分を破壊することは、少なからず近隣の他人をも破壊することで、しかしそれを望んでいるわけではなく、
むしろ極力避けようと試みるのだが、破壊衝動はそれで収まるものではなく、結局は自分と他人を破壊してし
まって、その結果壊れてしまったものの上に佇んでいる自分を、長いこと見つめていたりする。どこまで、な
なにに対して、どれだけ冷酷になれるのか。それをどれだけ体現できるのか。しかし生きる限り、どんなことを
しても冷酷なことであり、他人に冷酷になるか自分に冷酷になるかの違いくらいしかない。そのようなことを
包括的に救済するものはないのであり、するとどこにも逃げ道はなくなる。

悲しい光景だと思ふ

酔ったサラリーマンが土下座している

人の気配が消えかけた
阪急東通り商店街

泣いていたのかもしれない

私は

ホテル代を払い

男に体を明け渡す想像をする

(始まりや終わり 部分)

結局私たちは他人をどのように捉えているのだろうか。同性の他人。異性の他人。常識とは別の次元で、そのひとたちに本当はどんな言葉をかけたいと求めているだろう。また、どんなことをしたいと求めているだろう。それをもししたならば、それがあつ瞬間、愛と呼べるものに変つることはあり得るのか。他人との間に横たわる、越えられない深い深い溝の闇を見つめながら、それでも他人に、傷つけ合うまでちんすこうりなは近づく。そうすることによつて何が得られるのか。何を得られないのか。この詩集に描かれていたことのひとつである。

お疲れ様

辺りは

静まり返るだろう

それは

祝福だ

私には性器しかない

ノートの片隅に小さく書いた

制服姿の私が

遠くで抱きしめるように微笑んでいる

さむいな

こんな日が

くるんだ

(おしまいの日 部分)